

革命と排除の論理と6・25戦争期の日本

李先胤*

syoon303@hotmail.com

Contents

1. はじめに；『飢餓同盟』における文体の問題
2. 変形した身体と第三項排除
；ひもじい—境界線外のよそものという意識
3. 花園の権力構図と飢餓同盟の革命論
4. 機械化した身体が語る権力の内面化とルサンチマン
(Ressentiment)
5. 父の名の排除について
6. おわりに；革命の時代と1950年代の日本

Abstract

本稿は、6・25戦争に突入していた時期の日本を舞台に失敗した革命組織を描いた、安部公房の長編小説『飢餓同盟』を中心に、1950年代初頭の日本という地政学的位置における排除の論理を分析対象とする。まず、「ひもじい」という言葉の機能を確認することから分析をはじめ。「飢餓同盟」という組織は、「よそ者」として差別され、抑圧されてきた人たちが構成されているが、組織のリーダーである花井の独断により、織木の身体は革命のための機械化する。人間の身体に対する支配の問題を考察する作業を通して、権力の内面化としてのルサンチマンからなる奴隷道徳のシステムの機能を確認することができるだろう。表面上は非軍事化が唱えられながらも、アメリカの基地化6・25戦争に荷担していった日本の混沌した状況を、テキスト内の革命組織の表象に照らし合わせながら分析を進める過程で、父の名という問題が排除の論理に深く関わっている様相を明確にすることを試みる。

Key Words : 安部公房、飢餓同盟、ルサンチマン、身体の機械化、第三項排除、父の名の排除

* 東京大学大学院総合文化研究科 博士課程

1. はじめに；『飢餓同盟』における文体の問題

『飢餓同盟』は書き下し長編小説として1954年2月15日講談社から刊行された。安部公房が実際『飢餓同盟』を執筆したのは、1953年、6・25戦争の休戦協定が発表された時期で、ここに描かれている世界は1951年か、1952年の暮れ、即ち6・25戦争に突入していた日本を舞台にしている。物語世界の現在の視点で、「ダレス長官」、「アイゼンハワー大統領」についてのニュースがラジオで流れていることなどは、物語世界をこの時期へ特定することを傍証するだろう。又、「森四郎が花園にやってきたのは、十月の最後の日曜日、ちょうど五十日ほど前のことである」ので、「今」は12月の20日頃になる。

『飢餓同盟』は、「M県だけでも三つがある」程の特色ない地名である「花園」で結成された、ある同盟の物語である。佐伯彰一は「安部公房・その想像力の原質」¹⁾で、マーク・トウェインの小説流の「少年性」を安部公房に見ている。佐伯氏は「少年の視点に対する執着はアメリカ小説のお家芸²⁾であるのに、わが近代小説ではまれに属する」と述べ、日本ではその「少年の視点をそれ自体独特の価値としてとりに上げるのは、安部公房や大江健三郎、また三島由紀夫にはじまる新現象」と言い、「大江にとっての少年は、感覚的豊饒と流動の同一語であり、三島にとっては、ロマンチックな夭折の観念で縁どられた一つの絶対」を意味するとした。これに対し、「安部の場合には格別な少年意識なしに、筆者自身が主人公の少年と同一化」し、「どこにも属することなく、孤独を意識せずして孤立しており、行動を意志することなしに気軽の行動に乗り出してゆく」、この「即自態の少年」の「動き全体に少年の戯れや身の軽さがそなわっている」と彼は指摘した。そして主人公が少年ではない『飢餓同盟』の場合でも、「共通しているのは、おどろくほどの身軽さであり、過去の影の希薄さであり、家族や系累といったものの淡さである」としている。しかし、織木順一は、佐伯が指摘している様に、単に外部から突然

1) 佐伯彰一(1971)「安部公房・その想像力の原質」『国文学 解釈と鑑賞——70年代の前衛・安部公房』pp.10-21

2) 「おいえげい(御家芸)」とはその家に伝わる独特の芸。また、他人には真似のできない、その人独特の芸。(『広辞苑』第6版)

現れる「不思議な訪問者」としての「マーク・トウェイン的な設定」だけに留まらない。織木の場合は、植民地支配下の韓国—花園—東京—戦争中のヨーロッパ—花園といった、現代史の動きを背景に境界の往来を続けている存在であり、この物語内容の現在では、「不思議な訪問」をした織木が、死によって花園を離れるという「外—内—外」の物語モデルのケースでもある。後に述べる織木の身体、そして花井や同盟員たちの意識構造が持つ含意は、「無効で柔軟な空想力」を持つ「少年性」の物語としては分析しきれないものがある。

佐伯氏によると、『『飢餓同盟』では、田舎町の保守派の政事ボス、経済ボスが大いに活躍し、これに対して同盟側は「革命」を目指してけなげな反抗ぶりを示す…しかしこの程度の小説的枠組の図式を持って、政治的風刺など言いはやすのは、素朴すぎる。」「政治的な読書会はむしろ嫌悪を込めて書き込まれている。政治的反抗や暴露とは縁がなく、この小説が連想させるのは、別世界の夢、少年の支配するユートピアの物語」であり、「安部公房は政治風刺家としては失敗した」と佐伯氏はいう。しかし、次の冒頭にも暗示されているように、佐伯彰一が「少年性」と把握していたのは、「デンドロカカリヤ」以降、超現実的もしくはSF的と評価されるテキストで駆使された、安部公房特有の戦略的文体の性格であったと考えられる。

花園という地名はほうぼうにある。M県だけでも三つがある。だから手紙をだすときは、郡、大字、字、と、できるだけ詳しく書かなければ届かない。しかし手紙をだすわけではないのだし、それにある先生に言わせれば、物語というのは作者が本当だと言ひ張るほどウソにみえ、ウソだと言ひはるほど本当に見えるものだそうであるから、なおさらアイマイなままにしておくほうがいいようにも思う。
(一章・1)³⁾

ここに書かれているのは「別世界の夢、少年の支配するユートピアの物語」ではない。ミュージカルの登場人物のように過剰な行動やせりふは、「ウソだと言ひはる」ことによって「本当」を見せたがっていた安部公房の取った、異化作用を促

3) 『安部公房全集004』(1997)、p.94

す装置としての文体である。『飢餓同盟』と同時期に書かれている短編小説「R26号の発明」(1953.3<文学界>)、「犬」(1954.3<改造>)とかにもこのような文体、及び設定は見られ、それは「デンドロカカリヤ」以来こだわってきた、科学的モチーフと幻想的手法を同時に取り入れた、重要な創作技法であったと言えるだろう。

ところが、前述した佐伯の見解を含め多くの先行研究で『飢餓同盟』は、同時代評であった「リアリティーが見られない」(十返肇「長編小説合戦」『現代文学白書』、1955.3)など、否定的評価をされてきた。他方で、「現実をリアリティックに」とらえたという評価(林尚男「書評安部公房『飢餓同盟』」『国民文学芸術運動の理論』、1954.9)もあったが、このような肯定的評価には「風刺的な方法」に焦点が当てられている。鳥羽耕史は、杉浦明平の『ノリソダ騒動記』におけるルポルタージュ性との類似から『飢餓同盟』を論じ、「新しい政治小説への試みの一つ」として評価している。⁴⁾

本稿は、SF的要素を取り入れた安部公房初の長編小説と言える『飢餓同盟』を、林尚男と鳥羽耕史の意見を踏まえつつ、執筆当時の日本の地政学的状況として設定されている革命組織の表象に焦点を当てて分析することを試みる。ここで安部公房が、独自の文体と視線で6・25戦争期の日本という政治的物語世界を、次章で述べる「第三項排除」や「ルサンチマン」からなる奴隷道徳的な論理を軸に堅実に構築していたことを確認する作業は、SF的——後に「怪物的」とも表現される文体を異化作用を促す装置として選択した安部公房の戦略の性格を、一層明確なものにするだろう。

2. 変形した身体と第三項排除

；ひもじい—境界線外のよそものという意識

境界の外からの人間に対する排他性は、権力的序列を産出する。強力な力を持った外部勢力に対する、自己の他者化が進行されてきた、アジアの歴史的

4) 鳥羽耕史(2008)『運動体安部公房』、一葉社、東京、pp.184-208

な状況のなかでは、その内部でも絶え間ない他者化による分離と序列化が続いてきた。

「花園」には、他地域から来た人をひもじいと呼び、ひもじい様という神が町と町の境界を歩いている人に取り付き、その人は祟りにあうという話が伝わってきた。余所者——国境、地方などの境界の外から来た者や自分と違う者——に対する排他意識は、弱い者、不吉な者としてのひもじいという他者像を作り出し、祟りから逃れた自分の位置に安堵しながらそれを維持するための差別を継続させる。

花井の場合、主に問題にされているのは、身体をめぐる差別の問題である。身体性は自分の意志とは関連のない、選択できない条件である。ひもじい同盟の中心人物である花井には、「しっぽが生えているというわさ」があった。

疑惑…と言うのは、花井太助についての妙なウワサだった。しっぽが生えているというのである。小さな腫物ていどのもので、注意して見ないと気づかないくらいだとはいうが、しっぽということになれば、もう大小は問題でないだろう。しかしむろん見たものがあるわけではないらしい。ウワサがウワサをうんで伝説になったというのが正しいのだろう。花井が小学生のころ、動しての身体検査を受けるのをいやがって、受け持ちの教師に噛みついたというウワサがある。⁵⁾

花井のウワサは彼の身体的な特異性から起因するが、このような差別の談論には脅威性(恐怖)が結び付いて作用する。近代の人間はいわゆる近代的自我という概念を発明したのと同時に、その自我の理性により、内側にあるものと外側にあるものを区画(境界)付ける力をも発明した。人種や民族における医学的な根拠の希薄さにも関わらず、優生学的な論理は強化され、帝国主義国家による植民地支配にも適用された。自分が属する処の境界線を描き、その中に類似した仲間と留まることから得られる安心感の選択は、自分と異なる身体を持つ人に対する恐怖や嫌悪として表われ、その境界線上の存在を怪物的なものとして認識し、排他視する。その恐怖は事実の確認されようのない伝説や噂的な物

5) 『安部公房全集004』(1997)、p.96

語として拡張し、排除意識を強化する。このような論理はハンセン病の患者と幼児殺害や、同姓愛者とAIDS感染の問題を一体化するシステムにも共通するものとして見る事が出来よう。

「飢餓同盟」を構成する他の同盟員たちも、よそ者として差別され、抑圧されてきた人たちであった。劇団が解体し、職を求めて花園に来た人形芝居屋の矢根も花園の他者的な存在で、飢餓同盟員になる。矢根は花井の職場であるキャラメル工場の「広報」を任されるが、現実には街頭で子供たちに芝居を見せて、キャラメルを売ることであった。外から来た人間であり、権力の最下位にいる存在である矢根は、花壇で菊の花を一つとったことで、駅長から「君は他所者だろうか？この町の人間なら、こんなひどいことをするはずがない。…このひもじい野郎が!」と怒鳴られる。役所の柿井は保健所に赴任してきた森に「いずれ先生はよそのじゃないですか、他人の台所に注文つけるなんて、学問のある人のすることじゃない。…よそののものをこの町じゃ、ひもじい野郎っていうんだ…」と言う。森は医者という階級性にもかかわらず、「ひもじい」扱いから逃れることがないのである。

花井は多良根の広報用手段としての奨学金をもらって以来、多良根に使われていた。他者を内部に受け入れることにより、その他者性—外部性を確立するような方式は、社会のいたるところで行なわれてきた一つの支配手段でもある。身分、社会階層、ジェンダー、民族などのレベルでの他者化による差別は、秩序の中心(広義の権力)を成立させるための、個人または少数集団の排除である。排除される存在者は共同体の複数の我(二者)に対し、第三者であり(第三項排除/スケープゴット・メカニズム)、この論理は抽象的な形式を取って、商品と貨幣の関係のなかにも象徴的に見られると言えるだろう。⁶⁾

花園における他者であった彼らに、花井は、同じひもじいとしての問題意識を訴えて、同盟員達を集める。他者化による序列化は、花園の人たちに、昔から定住していた村人とよそのものという上下の区別をつけるが、他者的集団である同盟のなかでも序列化は生じ、権力の位置関係を多重的なものにする。花井は、

6) 『岩波 哲学・思想事典』、p.1256

ひもじいとして蔑視されているが、勤め先の工場では監視役でもあり、同盟のなかでもこの小集団内の最高権力者として他の同盟員達の上に君臨する。複数の商品に対し排除された第三項である貨幣のない理想の世界を、飢餓同盟が革命の目標としているところに、本テキストにおける他者性の表象の交差的配置が窺えるが、その運動資金を集めるために貨幣に拘束されてしまうという矛盾が生じる。

3. 花園の権力構図と飢餓同盟の革命論

『飢餓同盟』は、1950年代の地方の小都市という時空間を構成している。花園は20年ぐらい前の大震災のため温泉がでなくなり衰退していくなか、町会議員の補欠選挙が行われる。花園の権力構図は、多良根と藤野兄弟という二つの勢力によって成立していた。町長の多良根は、この町の経済の象徴であるキャラメル工場の社長である。日本ではじめてキャラメルを製造されたのは1899年で、今のような箱入りキャラメルが発売されたのは1914年である。佐多稲子は1928年「キャラメル工場から」で、劣悪な労働条件で働く少女の日常を描いた。太平洋戦争に突入してからは、砂糖不足のため、キャラメルは製造されなくなった。戦後、本格的にミルクキャラメルが製造され、自由販売されたのは、政府が業務用砂糖の配給を開始すると同時に乳製品の統制も撤廃した1950年4月の事であった。日本の近代におけるこのよなキャラメルの表象は、疎外された労働と飢餓の逆説的表現として『飢餓同盟』のなかで受け継がれていると言えよう。

多良根という資本家はキャラメル工場の社長であると同時に、知識の独占的、公的管理の象徴である図書館の館長でありながら、より優越な位置の集団によって作られた「物語」として「地域」を商品化している、「観光産業」の権力者でもある。花井は多良根から奨学金を貰って学校を卒業した。多良根は最初から奨学金の授与対象が出ることを考えていなかったこともあるが、花井が奨学生に決定されたとき、彼にはしっぽがあるというウワサがあったので、「日本人でないかもしれない奴」に奨学金は出せないと宣言する。その過程で花井は多良根に対する報復心と屈辱を覚える。

しかし、こうした感情はやがて畏怖として定着していく。この畏怖は、彼を極端な賛美者に変えるが、多良根と藤野の結託によって再び憎悪感を持つに至る。多良根の「人間並にあつかってやるとすぐこうだから、困る」という発言に、花井の従属的な位置を見ることが出来る。多良根は、一人娘を県最大の山林地主の息子である県の企画課長穴鉢倉吉に嫁がせ、穴鉢建設の重役に収まり、第一回選挙には、無投票で町長になった。穴鉢建設がS市から平方を通り、花園をぬけてM基地に到る道路工事を請け負って、いまや多良根が名実ともに町の最高権力者である。

開業医の藤野健康は、織木の両親や、花井とは違って、名前通りの大男で、最初彼にしっぽがあることをあばいた張本人であった。藤野健康は「製材所をたてるために多良根から峠の地所を買いとり、花井一家を追い出した元凶」で、弟の幸福は花井の姉の強姦者である。藤野兄弟は当時町の六割の土地を支配し、平方村にわたる二千五百町歩の山林を所有し、そのうえ、唯一の医師として町民の生命を支配する独裁者であった。

この兩大勢力は互いの権力の闘ぎ合いをするが、妥協と黙認でその均衡を維持することはあっても、その権力の下部からの挑戦は認めない。このような権力構造は土地、行政、軍事、人間の身体までを管理し、他者を排除する民族概念を中心に据え「日本人でないかもしれない者」はその保護対象から排除する日本の国家権力の象徴でもある。西欧の帝国主義支配の戦略をモデルにした日本による支配の構図は、植民地支配においてその支配言説をアジア諸国に注入させ、終戦後各国で新しい国民国家が成立された後も各国の政府により開発独裁という形で模倣された。⁷⁾

支配の構図の転覆を試みる勢力を革命運動勢力と呼ぶ時、日本の戦前における革命戦略の最大の標的が天皇制であったとすれば、戦後は占領軍であった。しかし社会党は「天皇制下の社会主義革命」を、共産党は「占領下の平和革命」を、労農派は「占領軍棚上げの社会主義革命」を主張した。革命上の重要要因——天皇制の問題——が革命戦略論の対象からはずされてしまったため、革命論

7) 小森陽一(2001)『ポストコロニアル』、pp.11-47

争の論理的進行は不可能であった。1945年11月8日第一回全国協議会で、日本共産党は、連合軍を「専制主義と軍国主義からの世界解放の軍隊」と規定し、その日本進駐によって「民主主義的変革の端緒が開かれ」とする「行動綱領草案」を提示し、12月の第4回大会でこれを正式に採択した。1947年第6回大会では「基本的方向は、ブルジョア民主主義革命の徹底と同時に、社会主義革命への過度的任務を遂行すること」という折衷的な決意が採択される。戦争責任の問題に繋がる天皇制、占領軍に対する論理の欠如という思想的な欠陥は、1950年以降GHQの弾圧期を通過しながら、共産党内部の戦略的論理の不在という事態を招いて、結局大衆の支持を失い、内部は混乱に陥るのであった。

花井によって結成されたひもじい同盟=後の飢餓同盟はこのような当時の反体制勢力の状況、特に共産党の混乱を象徴的に書いているように見える。6人の同盟員は花井の勧誘によって加盟しているが、同盟の組織構成や活動目標も、同盟員同士についての情報も知らない。同盟を主導するのは花井だが彼の論理は矛盾している部分が多い。「同盟がなかなかかどらなかったのも、資金がなかったから」と言い、地熱発電所の経営を提案するが、彼はかつて「金は毒で、権力は悪で、労働は罪だ」というアナキズム的発言をしていた。駅員の鉢山は「町のボスどもに対する花井の激しい攻撃の熱弁を聞き」、「同盟員になって1年たった」が、同盟員とは言ってもまだ「同盟について何一つ知っているわけではない」状態で、「彼と同盟との間には、点のように花井が存在するだけだ。」花井はずいぶんいろいろなことを喋ったが具体的な運動のことはなに一つ言わない。町政を罵倒しても、町政の分析をしようとはしなかった。革命をしなければならないといったが、どうしろとは言わなかった。彼がたずねようとすると不機嫌な顔をして、「君がじたばたしたってはじまらない。時が来れば本部は君の行動を求めよう。…組織を信頼するという事は強い節操のあらわれだからね。」と言うだけであった。

花井はその論理の貧弱さに比べて、強力な力を得ているのだが、それについては、実は他の登場人物—飢餓同盟員がその独断に消極的であるとも言える。反論が出て、それは一時的なもので、意見を通そうとしている者がいないのである。非転向神話の主人公であった日本共産党指導部の権威に対しても、積極的

に異義をする者が少なく、彼らの不適切な現実認識と独断は、共産党の弱化を加速化させた。

花井の言う革命の論理は、まず、花園の両大権力者である多良根と藤野の間を分裂させることによって、混乱を起し、既存の権力構図を打破することであった。その機会として、今度の町議の補欠選挙を利用し、二人の候補—藤野幸福と公安委員の宇留(ウルドック)のなかで、宇留を扇動し混乱を起そうとする。織木の遺書を読んだ後は、彼を利用した「地熱発電」事業が有力な手段になるだろうと判断し、この事業を進めるほうに向かう。

「不幸な人間」として存在していた六人は、町議の補欠選挙のための町会議が開かれる日の夜、最初の大会で集まっている。ここで、同盟の性格について花井は左翼も右翼でもなく、思想の否定であると答える。森が「アナーキズムですね」と指摘すると、それは重要じゃない、重要なのは実際の行動であると主張する。花井の非論理は同盟自体の不合理生に繋がり、同盟は解体していく。

花井太助はひもじいとしての差別を受けていたが、会社での彼は下級管理職で、番犬のような存在であった。社長は彼に労働組合の管理責任を追究している。花井は飢餓同盟を結成し、革命をめざす過程で、「これはぼく一人で喋ってるんじゃない。ぼくの口は町民1万2千の口を代表しているんだ。」と主張しながら計画の全体図を独占していた。このように飢餓同盟という組織の物語を、民主化を訴える組織のなかの非民主性、論理の非徹底性という側面から読むと、共産党の内部批判に繋がり、1962年の安部公房の共産党除名に至る道程はこのような脈絡での反発と無縁ではなかったと言える。6・25戦争期における日本共産党の武装闘争路線は警察の弾圧を招いただけでなく、過激組織としてイメージが悪化し、一般の支持率も下落した。このような脈絡で『飢餓同盟』の読みを進めていくと、花井の指示による過激な内容の人形芝居は反感を呼び、PTAによって人形師の矢根が追放される出来事や、組織の分裂という事態から(読書討論会に登場する共産党員が理念としてのマルクス主義であったならば)、敗戦後の混乱期の最中における共産党内部の矛盾の一面が浮かび上がってくる。

4. 機械化した身体が語る権力の内面化とルサンチマン (Ressentiment)

花園にひもじい同盟が結成されてから1年になる頃、織木は20年ぶりに町に帰ってくる。物語は織木が花園という町に帰って来た、雪の降っている駅から始まる。駅員である鉄山はこの男の登場を同盟の指導者の花井に報告する。織木は物語のなかで、意思を持って動いていない。織木は、意志をなくし、利用され続ける自分は死んでいるのと同じであると言った。彼は、物語の中で名刺と遺書という形式によって認識される。彼は自殺を決心し、遺書を準備していた。人間計器として使われていた現実のなかで、自分を支配することができる唯一な方法は、自分自身の死の支配であった。第二章は、織木順一の遺書で始まる。「書くという行為は、あらゆる人間の行為の中でもっとも人間的な行為だ。なぜならそれは自分を支配することだからだ。」織木は、この物語のなかで、自分を支配できない存在であった。しかし、自分を「毎日二時間づつ充電」し搾取する花井を、「批判しようとはせず、ただ理解しよう」とつとめていた。

前述したように、飢餓同盟の運動過程における資金難から、その解決作として案じられたのが織木の身体を利用することであった。織木順一は花井によって身体を占有され、身体が機械化・道具化される織木順一も、花井のように、身体的な特性を理由として差別されてきた人物に設定されている。

ぼくは両親が朝鮮にわたる途中の船の中で生まれました。父は朝鮮で三年間巡査をしました。…父は四尺八寸の小男、母も四尺七寸あまりの小女。花園では流れ者のことをひもじいといったので、それとちびを貼り会わした、ひもちびというのが両親のアダ名。⁸⁾

このような身体性という面で花井と織木は同じ弱者である。織木は戦争期の科学実験の対象として利用されており、織木という人物の設定と、織木の過去の物語として遺書が挿入されていることは、戦後という歴史的特殊性と不可分

8) 『安部公房全集004』(1997)、p.128

の関係にある。1949年、学徒兵の遺書を集めた『聞けわだつみのこえ』が、1953年12月には巢鴨遺書編纂会からはBC級戦犯の遺書『世紀の遺書』が出版され、衝撃を与えた。日露戦争以来、「英霊」が愛国の象徴としてまつられ始めたが、作為的に形成された「英霊」とは、国家によって動員された人々が、その死後も動員解除されずに国家目的に利用されつづける姿である。「英霊」は、現実における矛盾を覆い隠すシェルターとして利用される。織木の遺書を読んだ花井により、織木の身体はヘクザンという薬物を使用し、人間計(算)機として地熱の測定に使われる。時代的な背景とニュースの内容から織木が町に帰って来る現在では1952年の末から53年の初頭と考えられる。彼の帰郷は20年ぶり、町を離れたのが15才の時だったことからすると、織木が生まれたのは、1917年になる。1917年は海軍向けの科学兵器生産のため、日本光学工業が設立された年でもあった。日本でも朝鮮でもない海上の船のなかで生まれた彼は、後に秩父博士により兵器の開発のための道具として開発され、ドイツのブッヘル博士に委託され「再加工」される。「ドイツで」彼は「立派な人間メーターになり、分離電極測定法の簡易な実用化に成功する。」安部公房は織木順一を搾取と抑圧をされる人物として描きながら、戦争期に人体を利用する実験や武器の開発の問題を扱っているが、安部公房が満州に滞在していた時期、実際に満州731部隊では人体実験が行われた。石井四郎は1932年、軍医学校内に後の細菌部隊の中枢機関となる防疫研究室を設置、翌年ハルビン郊外に731部隊の前身である関東軍防疫給水本部が発足した。1941年満州731部隊と名を変えたこの部隊は、1936年から1945年まで細菌兵器の研究開発を行った。ここで3000人も中国人やロシア人、朝鮮人が、人体実験のため虐殺された。敗戦ののち東京裁判が行われるが、GHQは731部隊による人体実験、虐殺などの事実を知りながら、それらのデータを手に入れる事を条件に、731部隊の責任を免除した。

花井は織木を利用した地熱の測定の途中、「脈が120を越えて、血圧が80以下になって、外に出るのをまぶしがるようになって、爪に斑点ができはじめたら、すぐにヘクザンをやめること」という織木との約束を守らず、無理やりに計画を進める。花井によって利用される織木の家族は身体的な特異性のため、花園で蔑視されていた他者的存在であったが、植民地では植民地の人々が他者として

成立することにより、織木一家は支配者の位置に立つことができた。このような他者性と権力の相対性という問題は、花井と織木や他の同盟員の関係でも現れる。

差別されている弱者の中での再差別は日本の朝鮮人労働者の例でも見られる。戦時期に多数の朝鮮人労働者が強制連行された。安部公房はこのことについて意識的であり、1953年の『婦人画報』における座談会での発言で、朝鮮の問題に対する日本の無関心を、日本人の政治に対する無関心の問題と関連して指摘していた。戦時期の炭鉱で働く日本人労働者は、一方では朝鮮人労働者を差別する存在であったが、他方では朝鮮人労働者同様に劣悪な条件の下におかれ、日本人の上層職員から差別される存在であった。戦後日本の労働組合運動は朝鮮人労働者の組合運動から大きな影響を受けている。社会的弱者を代弁するという論理において、共産党のもうひとつの矛盾点が在日朝鮮人に対する日本共産党の立場であった。1945年の敗戦まで在日朝鮮人は強制連行者を含めて240万名以上にのぼった。日本における朝鮮人主体の共産主義運動組織は1920年、留学生を中心とした在東京朝鮮人苦学生同友会の結成以降、黒友会、北星会などの社会主義団体が日本人の共産主義運動との連携をはかると同時に、朝鮮における共産主義運動の統一を目指した。1926年には朝鮮共産党日本部が東京に組織されるが特高による弾圧が続くうえ、コミンテルンの「一国一党の原則」指示という困難な条件がつけ加えられた。日本共産党は、在日朝鮮人の全運動組織の解体を強要し、1931年、朝鮮共産党日本総局は解体声明を出す。在日朝鮮人の共産主義者が日本共産党に本格的な入党を始めたのは1932年からで、在日朝鮮人党員は、党中央本部を始め、各地方において活動した。このような経歴の持ち主たちが1945年日本の敗戦後、政治犯釈放運動促進連盟などを組織して活動した。

1946年8月に開かれた日本共産党第4回拡大中央委員会では、「朝連は、なるべく下部組織の露骨な民族的偏向を抑制し、日本の人民民主革命を目指す共同闘争の一貫として、その民族的な闘争方針を打ち出すことが必要」という要旨の「8月方針」が決定された。これは在日朝鮮人の革命闘争組織を日本共産党の下部組織として吸収するのみの措置で、戦後の朝鮮人を日本の少数民族のように見なしていたからであった。48年4月在日朝鮮人学校の閉鎖措置に反対する集会

が各地で行われた。これは米国側の左派勢力の弾圧路線と、日本政府の同和の次元での措置であった。しかし、日本共産党は、朝鮮人学校の閉鎖反対運動を展開する朝鮮人への支援に消極的であっただけでなく、党中央委員会書記局は「この暴動事件につき世論は、わが党の指導によったかのように取っているが、総選挙をひかえてまことに遺憾であり」、「朝連の問題は第二次的に取り扱うべき」という立場を堅持した。ここでは「暴動」という表現を使い、共同闘争というのは朝鮮人の利益のためには適用されないことを示している。同年8月には「朝鮮人グループだけの会議には日本人党員の指導者を招く。」、「党の会合には日本語を使え!」という方針も発表した。1945年10月獄中から解放された徳田球一や宮本顕治らの共産党幹部が、声明「人民に訴う」で天皇打倒を掲げて訴えたのは、ナショナリズムの否定はなく、「真の愛国」であった。共産党の民族主義的な路線と韓国・朝鮮民主主義人民共和国での6・25戦争の終戦などという情勢は結局、在日朝鮮人の団体の日本共産党からの分離をもたらし、55年に朝鮮総連が設立する。

権力は分化し続ける。しかし、そこには常に既存の権力の構造一象徴化された支配言説が父性的なるものとして内面化されている。弱者は強者を怨み、対抗しようとするが強者の論理は根強く、それに対する挑戦は容易ではない。弱者として強者に対抗する論理のなかでも、その弱者集団のなかの権力者や権力集団が登場する。そして、批判していた強者の論理と類似した形式で新しい順応の方向が提示される。20世紀の根本的な問題であった革命でもこのような人間の心の動きが利用された。ここにはルサンチマン(Ressentiment)の原理が働いていると言えるであろう。ニーチェは『道徳の系譜』で、キリスト教などの人類を救うことを目的とした「救済宗教」を分析する際にこの概念について言及した。ルサンチマンは、弱者の強者に対するひねくれた反感、仕方がないという感覚に近い、弱者が弱き自己を肯定するための理論である。ニーチェによると、ヨーロッパ社会の道徳的な価値観は、弱者の強者に対する「ルサンチマン」によって生み出されてきたものである。

道徳における奴隷一揆は、ルサンチマンそのものが創造的となり、価値を生み

出すようになったときにはじめて起こる。すなわちこれは、真の反応つまり行為による反応が拒まれているために、もっぱら想像上の復讐によってだけその埋め合わせをつけるような者どものルサンチマンである。すべての貴族道徳は自己自身にたいする勝ち誇れる肯定から生まれるのに反し、奴隷道徳は初めからして「外なるもの」・「他のもの」・「自己ならぬもの」にたいし否と言う。つまりこの否定こそが、その創造的行為なのだ。価値を定めるまなざしのこの逆転——自己自身に立ち戻るのになしに外へと向かうこの必然的な方向——こそが、まさにルサンチマン特有のものである。(ニーチェ『善悪の彼岸・道徳の系譜』⁹⁾)

自分を正当化するための転倒した価値意識が生まれることが、ニーチェが問題にした意味でのルサンチマンであり、権力システムの内面化が行われる一つの原理である。『飢餓同盟』の織木は自分を搾取する「花井を批判しようとはせず、ただ理解しよう」とつとめ、このようなルサンチマンからなる奴隷道徳の問題に陥る。このようなルサンチマンからなる奴隷道徳的特徴は、ロシアや中国の革命に対する日本共産党の姿勢にも現れていた。

ルサンチマンの問題においては、もう一人、即ち「司祭」の役割が注目されなければならない。他人、外部へ向かって形成されたの怨恨が司祭によって内部に向けられたとき、それは罪を持った人間としてのキリスト教的な規律として成立する。このような転換は、自己規制や強制的な社会規範として作用する。このような論理から見ると、日本共産党の非転向指導者達は、転向者および一般の党員に対して「司祭」として機能したとも言えよう。改革する対象であった古い道徳と体系を築いてきたルサンチマンと司祭の論理は、世界を変革しようとした集団のなかで、繰り返される。このようなシステムは50年代の日本共産党だけでなく、前に例をあげた中国、ソ連、朝鮮民主主義人民共和国、そして1980年代韓国の民主化闘争の場合にまでも、人間の集団が権力の問題から自由でない限り、働き続けてきた。「世界の変革」には、このような不作用を防ぐための手段こそが、変革を試みる哲学とともに要求される。

又、戦後日本におけるもう一つのルサンチマンは、日本の敗戦によりアメリカ

9) ニーチェ(2000)『善悪の彼岸・道徳の系譜』、p.393

に対し懐くようになった感情である。日本の左翼が社会主義革命を達成したロシアや中国に対し懐いていたルサンチマン、そして敗北した日本がアメリカに対し懐いたルサンチマンの拮抗状態が戦後にも長く続いていたのである。

戦争で敗北した日本が懐くアメリカに対するルサンチマンは強化され、アジアにおける日本の優越性に満足しながら、同じ構造で民主主義と産業テクノロジーにおけるアメリカの優越性を確固たるモデルとして認めるようになる。『飢餓同盟』ではアメリカに敗北した日本のルサンチマンが、その基底に位置していることが読み取れる。又、それは政治家・資本家・科学者という三つのカテゴリーの権力を持つ登場人物とアメリカの関わりとして提示されている。

5. 父の名の排除について

『飢餓同盟』は、1970年5月25日発表された再刊行本では多くの加筆が行われている。初出版と改正版の『飢餓同盟』の終末部分の内容は、正反対のものである。初出版では森医師はそのまま花園を去って行ってしまふ。しかし、改訂版のラストでは、次の文章が加えられている。

森は思った。まったく、現実ほど非現実的なものはない。この町自体が、まさに一つの巨大な病棟だ。どうやら精神科医の出るまくなどではなさそうである。我々に残されている仕事といえば、せいぜいのところ、現実的な非現実を、かくまい保護してやることではあるまいか。森は人垣をはなれて、歩きだした。しかし、駅の方ではなく、いまやって来た道を、もう一度診療所の方へ…新しい勤め先がきまるまで、どのみちたっぷり暇なのだ。傷だらけになった、飢餓同盟に、せめて繃帯のサービスくらいはしてやるいがい。森ははじめて、自分が飢餓同盟員であったことを、すなおに認めたい気持になっていた。正気も、狂気も、いずれ魂の属性にしかすぎないのである。¹⁰⁾

森は優越感——階級、知的レベル、中央・地方という出身地の差からの——

10) 安部公房(1970)『飢餓同盟』講談社、p.229

を持って、花園の人達を見ていた。彼は階級的に優位はあったが、無力な状態が続いた。初版から16年が過ぎた1970年の改稿で、森医師が見ている傷だらけになった飢餓同盟と、安部公房自身が1962年除名された日本共産党。最後まで積極的に参加はしていなかったが、「自分が飢餓同盟員であったことを、すなおに認めたい気持ちになった」森が診療所に向かう姿を書くことによって、自らの共産党員として「人民文学」に参加し、活動した「傷だらけ」の1950年代を省みている自分の位置を設定している。『飢餓同盟』の発表の前年の作品である『壁あつき部屋』(1953年10月試写)のシナリオは巣鴨拘置所で服役している戦犯たちの物語で戦争責任の問題が描かれ、そのあとの短編小説「パニック」(1954)や「R62号の発明」(1953)では解雇による失業など、労働者の現実における問題を扱っている。

安部公房は戦後の日本の社会的矛盾と混乱の根底に、戦争犯罪の責任の徹底的な追窮が問われていないという問題があり、弱者が搾取される状況が戦中から戦後まで続き、責任を問われるべきであった戦争期の権力者がまた権力を握るという不条理を、凝視した。このような問題を積極的に提起した共産党も、既存の権力の構造を模倣しながら50年問題をめぐる分裂のなかで弱体化した。このような時期に書かれた『飢餓同盟』は、戦前と外見だけが変わっている戦後の権力体系のなかで、新しい父性的なるものへの従属という人間精神の動きの問題から始まる新しい権力体制と、その解体の物語として読むことができるであろう。

フロイトは1903年出版されたシュレーバーの「回想録」を読み、精神病症例の古典であるパラノイア論「自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的考察」を発表した。ラカンは56年、シュレーバーの「回想録」をテーマにしたゼミを行い、「エクリ」の一論文になる「精神病の治療が可能になるため、その治療に先立って問われるべきである一つの問題について」を書いた。ラカンは、フロイトがパラノイアの機制として指摘した「内的に除去されたものは外界から回帰する」という命題を取り上げて、「内的に除去されたもの」をフロイトのテキストからの「排除」という概念に結びつけた上、シュレーバーの「父の名の排除」を分析の中心に据える。ラカンは妄想の形成について、レヴィ=ストロースやソシュールの影響のもとで展開したシニフィアン理論の見地から説明した。ラカン

がフロイトとともに言うように、知覚において「なにか」が言語化への可能性(シンボル化)を奪われて「排除」される事態とは、いわば記号化されない記号化が起きるという意味でのシニフィアン¹¹の生成に関わっている。そこで排除されたものが妄想として現実界に立ち帰り、これがパラノイアにおける妄想的出現である。『飢餓同盟』の同盟員たちが花井に求めたもの、花井が多良根に求めたものは父の名の問題であり、そこには常に排除の論理が付きまといると言える。

ラカンのシュレーパー論で、もう一つ、重要な点は「父の名」つまり「掟」の創設に先立って存在する「母の欲望」に注目したことである。父権社会構造における父の問題とは、社会構成そのもののあり方として立ち現れている。そこでは、通常主体に要請されている父のメタファーとは母の抱くファルス(Phallus)への欲望が介在して初めて設立されうるものとしてある。だが、その父のメタファーの設立が失敗してしまうと、それは、父の名がかつて一度も「他者」の場に位置づけられなかった、という事態をもたらす。ラカンによるとそれが「父の名の排除」という事態で、そこに精神病が始まる。

しかしながら、竹村和子が『愛について』で指摘しているように、「他者」の欲望のシニフィアンをファルスと名付ける命名法そのものには矛盾が存在する。次代再生産をしないさまざまな性現象、ファルスで還元できない意味を背負う「倒錯者」の存在は、「他者」の欲望のシニフィアンを持つ位置を「男性的性位置」に、「他者」の欲望のシニフィアンである位置を「女性的性位置」に分類する解剖学的性差に依拠した分類法そのものを錯乱するものである。フロイトもラカンも、「正常的」男性性や女性性を説明しようとして、例外を設けなければならないとき、「正常的ではない」性現象を言及した。しかし、生殖を行わない性現象を「倒錯」として周縁化し、生殖イデオロギーに支えられた男女の愛の経験を語るということは、そこで語りきれない多くの声を黙殺することになるだろう。『飢餓同盟』で花井の母は幼年期の織木を人体実験の対象として売る。このような主要女性登場人物の否定的設定は、安部公房の初期テキスト、特に作品集『壁』に収録されている短編からもその始発点が窺われる。「魔法のチョーク」(1950)では、主人公の貧

11) ダーニエル・パウル・シュレーパー(1991)『シュレーパー回想録』、pp.506-507

しい青年画家が部屋の壁に赤いチョークで書いたものが、実物として現れるが、彼の手により創造されたイヴの要求により赤いチョークの半分を彼女へ渡してから、彼の創造の世界は破壊される。ここに描かれている「創造された」ものとしての女性像などには、ジェンダーをめぐるこのような二項対立主義的枠組みの問題が窺われる一方、他方では女性像に対するその強烈なイメージから敗戦後、去勢された状態であった男性たちに対して強くならざるを得なかった、戦後期における日本女性の状況が形象化されていると言える。

6. おわりに；革命の時代と1950年代の日本

世界革命というソ連の計画とアメリカの挑発誘引・黙認という状況のなかで、1950年に大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国の間では6・25戦争が勃発し、その戦争は未だ終わっていない。第1次世界大戦後アメリカが推進したニューディール政策による国内に限定した資本強化路線が、軍需産業の増強とグローバル化戦略へと転換していった第2次世界大戦以後、日本の姿はアメリカの代理人として変身を遂げる。そしてその決定的な舞台が6・25戦争であったと言えるだろう。

失敗した革命組織の物語である『飢餓同盟』が描いている韓国戦争期の日本の周辺では、ソ連、中国、朝鮮民主主義人民共和国がマルクス主義に基づく世界の変革を試みていた。その革命の過程で見せた基本的理念からの離脱の原因の一つには「権力者の指導」の誤謬という問題が存在する。「民衆のための政治」を指向しながらも、繰り返し行われる権力者の独断と、それに異義を提議し、中絶させられない指導集団及び民衆の間の力関係が、このような革命の構図を描いてきたのであろう。

革命が成功するためには軍隊や警察などの勢力が必要とされるが、この3国の革命の場合も党としての軍隊が役割を果たした。これに対し、日本の戦後の場合、武力闘争による革命の基盤は成立していなかった。敗戦による軍事裁判は行われたものの、戦争犯罪の総責任者であった、天皇の責任は問われず、国

家・民族という枠組みを強化する象徴的支配中心として残存することになる。このような非論理性を基に成立した日本の戦後は、支配の中心が天皇を中心とした支配勢力からGHQに移動し、その後GHQが廃止された後もその両者の結合とも言える構造を認定した上で、その支配戦略を模倣した形で成立した。しかしながら、このような精神構造は、これら支配勢力を否定した共産党においても例外ではなかった。徳田球一らによる日本共産党の指導方針がいわゆる「極左冒険主義」を問題化していた1950年代初には、同様に非論理的なことを信じさせ、計画に従わざるを得なくさせる、ある構造が存在していた。『飢餓同盟』の中の革命もこのような支配権力の構造問題によって失敗し、同盟は解体してしまう。

1951年9月8日、日本と、ソ連・支那・インド等を除く旧連合48ヶ国との間にサンフランシスコ講和条約が、調印された。米・英だけで草案を作成し、強行されたこの条約は、日本の個別的・集団的自衛権を承認し、日本の再軍備と外国軍隊の駐留継続を許容した。この条約はアメリカの極東戦略を反映しており、集団的自衛権と外国軍隊駐留継続は、本条約調印同日に調印された「日米安保条約」として具現化した。6・25戦争期の日本はこの条約により本格的な代理人(agent)として動員され、アメリカの基地化した日本国内ではその戦争をばねにした経済的復興が進行していった。このようなプロセスに有効な政策的対応ができなかった日本の現実がそこにはあり、それを牽制し批判すべき存在であった日本共産党も、安部公房が党員として運動に参加していた当時、内部の混乱に陥り、その役割を果たす事はできなかったのである。

6・25戦争の休戦協定が結ばれた1953年に執筆された『飢餓同盟』は、敗戦後強かった日本国内における反戦のムードとは裏腹に、アメリカに全土を基地として提供しながらも、横浜基地からB29が飛びたって北朝鮮を空襲、空爆したことに気づかず終わる精神構造があったことを喚起する。そして韓国戦争が進行していく中、自ら体験していた日本共産党の組織における矛盾を、滑稽化して映し出した。『飢餓同盟』の花井は大文字の他者としての権力者にルサンチマンを抱き、敵視しながらも、それを模倣する主体=行為体(agent)である。花井と同盟員たちはテクノクラートである博士により利用されていた頼木の身体を、同じく蹂躪し、権力の奪取を図る。花井自身が町の権力者たちの代理役(agency)で

もあったという限界と、それを超える権力を求める欲望との不均衡のなかで、彼の指導力は信頼を失っていき、同盟員たちは分裂し、飢餓同盟の革命は失敗にいたる。『飢餓同盟』における同盟員たちの失敗と分裂の物語は、父性的なるものとしての帝国主義的支配と被支配をめぐる権力構造の特徴と、それに連動する精神構造としてのルサンチマンが、戦後から現代にいたるまで日本に存在しつづき、時代の変化とともにまた繰り返されている変奏の様相を形象化している。

参考文献

- 安部公房(1993)『安部公房全集004』新潮社、pp.94-224
 安部公房(1972)『安部公房全作品』新潮社、pp.5-139
 安部公房(1954)『飢餓同盟』講談社、pp.3-229
 牛葉宣(1971)「70年代の前衛・安部公房特集」『国文学 解釈と鑑賞』1971年1月号 志文堂、pp.10-86
 今村仁司(1992)『排除の構造』筑摩学芸文庫、pp.113-266
 岡庭昇(1980)『花田清輝と安部公房』第三文明社、pp.70-89
 小熊英二(1995)『単一民族神話の起源』新曜社、pp.6-9、pp.369-373
 姜徳相(1997)『朝鮮人学徒出陣』岩波書店、pp.315-338、pp.369-386
 高峻石(1985)『在日地朝鮮人革命運動史』柘植書房、pp.235-275
 小森陽一(2001)『ポストコロニアル』岩波書店、pp.11-47
 井上さし・小森陽一外(2003)「三島由紀夫と安部公房—〈仮面〉と〈砂漠〉の預言」『座談会昭和文学史四』集英社、pp.211-318、初出『すばる』2000年10月号
 ダーニエル・パウエル・シュレーバー(1991)、『シュレーバー回想録』小川浩・金関猛訳、石沢誠一「解題」、平凡社、pp.504-523
 鴨遺書編纂会(1984)『復刻世紀の遺書』講談社、「付録」pp.1-16
 高野斗志美(1979)『増補安部公房論』花神社、pp.218-223
 立石伯(1994)「アヴァンギャルドとメタフィジック」『講座昭和文学史第4巻—日常と非日常』新曜社、pp.67-75、
 谷真介編著(2002)『安部公房評伝年譜』新泉社、pp.29-47
 ジョン・ダワー(2001)『敗北を抱きしめて』(上)、三浦陽一・高杉忠明訳、岩波書店、pp.343-371
 ジル・ドゥルーズ(1998)『ニーチェ』湯浅 訳、筑摩書房、pp.43-58
 鳥羽耕史(2007)『運動体安部公房』、一葉社、pp.184-208

- 永瀬唯(1999) 『欲望の未来：機械じかけの夢の文化誌』水声者、pp.2-4, pp.163-186
- 文京洙 (1995) 『在日朝鮮人にとっての戦後』 『戦後日本占領と戦後改革第5巻過去の清算』
岩波書店、pp.159-196
- ニーチェ(2000) 『善悪の彼岸・道徳の系譜』 ニーチェ全集11、ちくま学芸文庫、pp.375-482
- 日本共産党中央委員会(1994) 『日本共産党の七十年』、新日本出版社、pp.209-248
- 日本共産党(1981) 『日本共産党の五〇年問題について』、新日本出版社、pp.5-20
- 金東鶴(2006) 『在日朝鮮人の法的地位、社会的諸問題』、『在日朝鮮人の歴史と文化』、明石
書店、pp.139-209
- 花田清輝(1954) 『アヴァンギャルド芸術』、講談社、pp.152-160
- 平田哲夫(1978) 『戦後民衆運動の歴史』三省堂、pp.1-58
- 広松歩編(1998) 『岩波 哲学・思想事典』岩波書店、p.1256
- ジャスパー・ベッカー川勝貴美訳(1999) 『餓鬼』、中央公論新社、pp.14-80
- リン・ホワイト青木靖三訳(1999) 『機械と神』、みすず書房、pp.58-75, pp.171-182
- ヴィリエ・ド・リラダン斎藤磯雄 訳(1996) 『未来のイヴ』、東京創元社、pp.205-211
- 渡辺宏志(1976) 『安部公房』審美社、pp.56-73
- Tim Armstrong (2001) *Modernism Technology, and the Body : A Cultural Study*,
Cambridge UP, pp.13-41

- ❖ 투고일 : 2009. 6. 30
- ❖ 심사일 : 2009. 7. 16
- ❖ 심사완료일 : 2009. 7. 28